

年間テーマ(案) 学術情報流通の新たな地平: COVID-19を契機とした再検討		
日程(予定)	テーマ(案) 及び 企画WGメンバーの関心事項	WG担当(予定) ◎主査
第1回セミナー (9月開催予定)	<p>○研究データ公開と共有の境界線</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究データの公開が広く推奨されている一方で、社会科学や医学の分野では条件を満たした利用者へのみデータを提供する「制限公開」が行われている。昨今、研究データのライセンスや機密保持の観点からこの制限公開に対する関心が高まっているが、そのプロセスはよく知られていない。現在、制限公開を行う機関から制限公開の実態(データ提供者との関係性、制限公開の提供フローとその労力、利用者情報の管理)を共有することで、機関が制限公開を行う際の課題を明らかにしたい。 バイオの世界にも制限データの実践例はあり、それを理由にデータを出したくない人もいる。そういったことを含めて議論する場としてもいいのではないか。 ライセンスについては、研究者がライセンスを公開してCC BYで公開したのに、それを集めて誰かが出版したら怒り出したという事例があった。このようなことは局所的に起きており、ライセンスについて正しい理解が得られていない状況がある。どこで制限するかなど、ライセンスは大きなテーマだと思う。 論文などの文献情報においては、CCなどのオープンライセンスの採用が広まりつつある。研究データにおいてもよりオープンなライセンスの採用が好ましく、実際に広まりつつあるが、再利用まで考えた場合、文献情報とは異なる特有の課題が存在する。まずはそうした課題を認識してもらおう。RDUF小委員会によるガイドラインも提案されており、さらに議論する機会が熟しつつあると考える。 ライセンスの議論も一度SPARC Japanでもしておきたい。CCのメリット、デメリット、ガイドラインを含めた議論を展開したい。 研究データライセンスと制限公開とはかなり近いテーマだと思う。おそらく研究データライセンスに合わせて、データを公開したい側の意図でその制限公開の形が決まるので、実際のところの関係を明らかにしたい。 境界を意識しているかどうかはかなり大きいのではないか。例えば今まで狭い研究コミュニティのなかでデータをやり取りしている場合は、コミュニティの中ということが特に意識されていないことが多かった。コミュニティの外につながった瞬間にこんなところに見せるはずではなかったというような話になる。恐らく大学でも同様で、大学の中の人だけなら見てもよいが、外のことを意識していない、境界がどこにあるのか意識されていない問題があるように思う。境界は何なのか、境界を超える条件があるとしたら何か、意識していくことが大事。境界を認知させること、皆が思う境界は、ほとんどが共有であることが伝わるだけでも今の段階ではよいのかもしれない。 	◎朝岡(NII/RCOS) 八塚(NBDC) 池内(文教大) 林(JIRCAS)
第2回セミナー (10月, OAWeek)	<p>○オープンアクセス Bibliodiversity</p> <ul style="list-style-type: none"> covid-19により促進されている研究におけるデジタルトランスフォーメーションに伴って見られる、Bibliodiversityの様相を共有し、将来を見通す。 これまでのセミナーを通して、公開のところまでの議論は深まってきたので、その先の発信や取りまとめを新たな柱として考えたい。 大学が先導する学術情報の新たな形、具体的にF1000の出版を決めた筑波大学の例を取り上げたい。新たなオープンアクセスの出版モデルとなりうるか、既存の出版社との関係、大学による日本語文献・データの発信のための強力なプラットフォームになりうるかなど多様な論点が考えられる。どういう狙いで実際にどんな苦労があるかを伺いたい。 リポジトリやプレプリントと商業出版との関わりは、グリーンOAやゴールドOAの話にも繋がっていくので、かなり際どい話題ではあるが、絡めてみても面白いのではないか。 今後、出版社側がプレプリントをかかえる方向性が出ており、毒まんじゅうとみるか信頼性があるとみるか、その辺を議論するだけでも面白い。 2020年4月にCOARが“bibliodiversity”(書誌多様性)の促進を呼びかけるペーパー“Fostering Bibliodiversity in Scholarly Communications – A Call for Action!”を公開した。これを受けて、学術情報流通における多様性の意味、現状について確認し、必要性や課題について提案、議論する場としたい。各立場のステークホルダーの提案や議論する場にできればよい。 新しいものが色々出てきているなかで、やはり動向を大掴みしておきたいというニーズは多い。一気に加速して多様な動きがあるなかで、今どういうことになっているか今一つよくわからない面もある。抽象的な議論をする前に、研究者や図書館関係者が知っておくべき情報・状況を整理して、多様な学術出版の現状を把握できればそのあとの話につなげやすい。 電子ジャーナルや論文のOAは日本でもかなり議論が深まっているが、電子ブックのOA化には定まったモデルが見られない。また、国内では学術書や教科書の電子化も不十分との声がある。一方で、SCOAP3 for BooksやKnowledge Unlatchedなど、海外では電子ブックのOA化の試みも始まっている。これらの取組を参照しつつ、日本の現状と今後の在り方を議論する場とする。 “Bibliodiversity”は大変重要だと思う。図書館の原点に立ち返るような話題で、情報には何があるのか、情報をどう取り扱うか、誰が取り扱うか。学術情報を担うユニットも変容するし、それを担う人や組織も変わっていく。複数のパラメータが変わっていくので、暴発しそうな議論だが、図書館としても研究者としても避けては通れない。 学術情報のオープン化は、オープンデータやプレプリントなど多様な切り口で広がっているが、日本では未だ国として進む方向が定まっていない。いま一度査読誌の問題に立ち戻ってグリーンOA、ゴールドOAの状況を整理し、今後の日本の進む道を検討するきっかけにできないか。多様性をもってどちらと決めずに取り扱っていく方法もあり、例えば、どちらとも決めずに進めているフランスの取り組みを参考にしつつ、査読誌の問題について議論する場としたい。 	◎矢吹(横浜国大) ◎池内(文教大) 安原(NII/JPCOAR) 山形(北海道大) 林(NISTEP) (林(JIRCAS))
第3回セミナー (1月)	<p>○(仮)実践 研究データ管理 Part.2: 管理と公開の実際</p> <ul style="list-style-type: none"> 昨年度(2020年2月)、同テーマでのセミナーを開催し、そこそこ評価をいただけたと考えている。研究データ管理の実践を目的としている以上、一回行えばよいものではなく、まだ紹介できていない研究データ管理の試みや、最新情報のアップデートが必要である。 これまでデータ管理については、ポリシーやルール、管理や公開をどのようにすればよいかなど扱ってきたが、もう少し実際に利用している機関の話が聞きたいという声がある。2020年秋までロングランテストが行われているGakuNin RDMIについて、実際に利用した機関から期待していた「研究データ管理」が行えているか、知見を共有いただく場としたい。昨年第4回セミナーでNII側からの説明は行ったので、実際に利用している機関からのコメントやこれからの課題も取り上げてみたい。 研究データの「公開」の機能について、3月に公開されたJ-STAGE Dataの概要についてJSTご担当より紹介いただき、相互の連携等についてディスカッションしたい。登壇候補としては、J-STAGE担当者に加えて、学会側の話も聞けたらよい。 GakuNin RDMIに関しては、動くものが見えれば見えるほど広がるだろうし、それはJ-STAGE Dataについても同じことである。 J-STAGE Dataについては単独テーマでは成り立たない可能性があるが、制限公開やライセンスという切り口で取り上げる方法がある。 	◎八塚(NBDC) ◎林(JIRCAS) 朝岡(NII/RCOS) 安原(NII/JPCOAR)